

PADMANABH S. JAINI

「東南アジア仏教における疑經ジャータカ」¹⁾

(訳*) 吉 元 信 行

上座佛教徒たちは、その歴史の初期の数世紀に、自らの三蔵 (Tīpiṭaka) について重要な増広に乗り出した。というのは、幾つかの独立したパーリ語作品——特に Milindapañha²⁾, Nettipakaraṇa³⁾, Paṭisambhidāmagga⁴⁾, さらにまた多量のジャータカ集——も小部 (Khuddakanikāya)⁵⁾ として知られる広範囲な聖典集録にこれを含めることによって、それらを聖典としての地位に持ち上げたのである。この習わしは、ブッダゴーサ (およそ A. D. 425年) のはるか前、古代シンハリ語による註釈 (Aṭṭhakathā) が書き下ろされる頃に、ようやく終結したと思われる。その後に作られたあらゆるパーリ語作品は聖典と見なされることはなかった。しかし、承認された教義および権威ある伝統にそれらが忠実であることから、“準聖典 (semicanonical)” とも呼ばれるべきある種の権威が特に与えられたのである。このような地位を持つ作品は、三蔵原典の註釈、ブッダゴーサの Visuddhimagga⁶⁾ の如き哲学的聖典釈義、さらに Mahāvamsa⁷⁾ や Jinakālamālī⁸⁾ のような歴史年代記が含まれた。どのような新しい經典もまた戒律規則も、固定された原典に加えることは許されなかった。また、後のアビダルマ論書、例えば Abhidhammatthasaṅgaha⁹⁾ は、聖典には見出せない論 (知覚過程の理論、即ち vīthi=道筋) を含んでいたかも知れないが、それでもなお、その正統性の主張は、聖典の先例に忠実であることに基づいていた。この同じルールは非常な細心さをもって、後の膨大なパーリ物語文学、例えば Dhammapadaṭṭhakathā¹⁰⁾ の如き、また Sīhaḷavatthu¹¹⁾ のようなあまり知られていない集成、あるいはずっと後の Dasabodhisattupattikathā¹²⁾ などにも適用された。このような物語の語り手はその聴衆と共に、これらの文学集成に含

まれているほとんどの物語は聖典自体ではないことを弁えていたことであろうが、しかしその物語の源泉となっている大部分の素材は尽きせぬ三蔵の貯蔵庫から採られていたことについては一般に広く知られていたのである。

自らが生まれ育った土地固有の文化の中から新しい要素を引き出し、古い聖典の物語に潤色を施そうとする仏教徒語り部達の傾向があるとしても、12世紀から13世紀にかけてタイ北部、今日のチェンマイ市周縁に位置した敬虔な佛教僧集団の中で発展した大衆語り文学生成の母体が、結局、東南アジアの仏教徒たちであったということは、少なからざる驚きである。フランスの学者 L. Feer が、パンニヤーサ・ジャータカ (Paññāsa Jātaka 〈チェンマイ50話／以降 PJ と略記〉) と題されるパーリ語・語り物語の集成に最初の注意を喚起してから、およそ100年が経つ。彼はこれらが、彼が命名した“格外聖典 (extra-canonical) ジャータカ”¹³⁾の一集成であるとしている。彼によれば、これらの物語には少なくとも3種のパーリ伝承本があり、一つはビルマに、もう一つはカンボジア、他の一つはシャム(タイ)／ラオスに存在する。1917年、L. Finot は、この集成に含まれる物語の題名索引を作成し(1917: 44-50)、各々の伝承本が50話のみをそれぞれ含むにもかかわらず、これらのすべての物語は同一ではなく、事実上、PJ 集成に含むと考えられるおよそ100の独立した物語であることを発見したのである。さらに彼は、題名が同一であっても、殆んどすべての場合、物語は異なっており、かくしてそのことはかつての一つの核物語が、後にさまざまな増広や削除を経て、いろいろな地方版となったことを示しているとしている。

これらの PJ がビルマやシャムの年代誌においてさえも格外聖典とされていたことは、16世紀王朝年代誌 Jinakālamāli および19世紀聖職者年代誌 Sāsanavaṃsa¹⁴⁾の両者が、これらになれ親しむことがなかったとは想像し難いにもかかわらず、共にこの作品に言及していない事実からも明らかである。この書物の如何なる公的禁止の事実も見当たらないが、口承によれば、マンダレイのミンドン王 (King Myndon of Mandalay; r. 1853-1878)¹⁵⁾がこれを承認しなかったと伝えられている (Jaini 1966: 553-4, n. 10; 1981-3: vol. I, p. V.)。このよう

な王家の否認が、明らかに多くの僧院においてこの書物の処分を促し、結局ビルマ各地には殆んど写本が残らなくなってしまったのである。見たところ、これら集成はシャムやカンボジアの王宮ではこのように嫌われたわけではなく、PJ 伝承本たる多量の貝葉写本が、なおもバンコック博物館やヴェトナム戦争前のプノンペンの僧院に存在したのである。実際のところ、この作品のタイ語訳簡約版がダムロン親王 (Prince Damrong)¹⁶⁾によって制作された事実 (1926)¹⁷⁾からも、PJ への王室の後援がはのめかされている。戦前のカンボジア政府もまた、これらの集成に好意をもって臨み、カンボジア校訂本50話のうちから25話が、1953年を始まりに佛教協会 (Institut Bouddhique) から出版されている¹⁸⁾。唯、ビルマではこれらの作品は殆んど失われてしまったようである。そうではあるものの、ビルマ伝承本の刊本が、1911年 Hanthawaddy Press 社によって出版された。しかし、その編者や写本の由来については何の情報も与えられていない。まずいことに、これら刊本の大部分は、第二次大戦中に原写本とともに焼失し、テキストは再び世に埋もれてしまったのである。そうこうするうちに、スリランカおよびビルマに起源する既知のパーリ語文献のほとんどすべてがロンドンのパーリ・テキスト協会 (Pali Text Society) の後援の元に出版された。しかし、これら格外聖典のジャータカ写本は東南アジアの僧院図書館以外では見聞できないことから、結局、西洋のパーリ聖典学界には知られずに残ることとなった。今日、これらに再び光を与えた功績は、G. Terral 夫人に帰せられる。夫人は、1956年 Samuddaghosa-jātaka¹⁹⁾と題する一つの物語を取り上げ、フランス語訳を添えて、ビルマおよびタイ校訂本両者からのパーリ・テキストを出版した (Terral, 1956 : 249-351)。夫人の翻訳および文法註釈は、学界にテーラワダ聖典およびその註釈書に存在しない美しい愛の物語を紹介することとなった。夫人の仕事は、私に東南アジアのPJ 写本を探し求めることを促し、1961年にパガン近郊の僧院にあった当該ビルマ校訂本のたった一つの写本の写真版を手にすることを得たのである。この作品の中にある一つの物語 Sudhanukumāra-jātaka (PJ No. 11)²⁰⁾の批判的分析によって、Sudhanu 菩薩とその美しい王妃 Manoharā との愛の物語は、ちょうど Mahāvasutu²¹⁾の

Kinnarī-jātaka および Divyāvadāna²²⁾の Sudhānāvādāna のように、非テラワダ起源によっていることが判明したのである。しかし、この物語は単にこれら二つの源泉からの逐語的引き写しではなく、ビルマおよびタイに共通する Manora²³⁾と呼ばれる劇場演劇になおも生き続ける、地域自生文化から導き出された多くの民族的要素を加え含んでいたのである。この発見は、これら物語の完全蒐集が、テラワダ宗教が地元の異教的伝統と互いに影響しあった東南アジア文化を研究するにあたって、非常に重要であることを示すものである。このパーリ語物語中の幾つかの挿話は、Divyāvadāna の根本説一切有部 (Mūla-Sarvāstivāda) 伝承本²⁴⁾からの場面を絵描いたボロヴドゥール浮彫りの幾つかを解釈する上で参考となるものであった。そのあらゆる意図および目的から見て、この物語は“疑経ジャータカ (Apocryphal Jātaka)”と呼ぶことができる。その素材はパーリ聖典ジャータカ集 (Pāli Jātaka book), すなわち Jātakatṭhavaṇṇanā (Fausbøll, 1896)²⁵⁾自体から引き出されたものではないにしても、当該文学ジャンルで用いられる標準形式へのその注意深い忠実さは、これをジャータカ文学の一つに含めることを正当化するのである。

PJ に含まれているこの疑経のジャータカは、パーリ三蔵の聖典ジャータカの形式や内容に従っている。文字通りの「出生の物語」である Jātaka は、通常の道徳的な意味を付け加えた民話を超えるものである。それはむしろ、シッダルタ・ゴータマの物語であり、彼自身によって語られ、彼の幾重もの過去の生存の物語——動物としてであれ、あるいは人間としてであれ——(まさに)そのとき、仏陀となるべき存在 (bodhisatta) として、なくてはならない徳、なかんずく布施 (dāna), 忍辱 (khanti), 智慧 (pañña) の完成 (pāramī) に至るまでを修行した物語なのである。現世で起こったある出来事が、彼の前世における一つで起こったことなのだとして仏陀に物語を語る機縁 (nidāna) を与えるのであり、この過去の物語 (atītavatthu) がジャータカの本体を構成するのである。その物語は過去の主要人物と現在知られている人々との連結 (sammodhāna) で完結している。疑経のジャータカはこれらの3つの主な物語の階層を厳密に保持している。即ち因縁、過去の事、そして連結とである。

現存の形式をとっているジャータカは、語りの散文と韻文 (gāthā) から成り立っている²⁶⁾。テラワダの伝統によれば、ジャータカ聖典は韻文からのみ成り立っており、散文は後の時代に付け加えられた「註釈」(aṭṭhakathā) と考えられている²⁷⁾。物語の現在の背景、即ち因縁 (nidāna) は、それ故にいつもこのジャータカ固有の韻文の第一行からの引用から始まっている。そしてどこで、いつ、どんな背景でその韻文を仏陀が語られたのかとの問いへと続いているのである。疑經のジャータカもこの様式に忠実に従っている。

主題 (テーマ) の上でも同様に、疑經ジャータカは、聖典を模範としており、菩薩が修める波羅蜜 (pāramitā) の数々を真似ている。この点で、ジャータカ本の中で最も大部で、また最も痛切な物語の一つである Vessantara-jātaka (Fausbøll, 1896, Vol. 6: 479-596) は、Paññāsa-jātaka の多数のジャータカにとり、インスピレーションの主要な源泉であったように思われる。ゴータマが、菩薩 Vessantara としてその転生の中で達成した布施の常人を超える完全さは、東南アジア諸国の仏教徒に、深くそして永続する影響を及ぼしたのである。その集成に見られる物語の半数以上は、この最高の布施に関する主題のバリエーションである。これらの物語の要点は、自らの妻や子供を施捨すること、このような出来事に付きまとう悲哀、菩薩の決意を試すために現れる神々の王・帝釈の出現、その後の王家の家族の再会である。このような菩薩の布施を例証する物語は沢山ある：私たちのヒーローは、彼の財産やその妻を惜しげなく施捨すること (Arindama-jātaka²⁸⁾のごとく) に決して満ち足りることなく、さらには自分自身の身体を切り刻むこと (例えば、PJ Nos. 17, 18, 29) に甘んじてのち、帝釈によって命を復活するのである。少しばかり異なったモチーフ——即ち、自らの命を犠牲にして僧侶を迫害から救い出す (PJ Nos. 2, 31) ——を持ち込んだ若干の物語を例外とすれば、これらのタイプのジャータカは、実質上、僧侶へ衣 (kaṭhinadāna) やその他の必需品 (parikkhāradāna) を供養することの賞賛以外に、どのような企みも保持していない (例えば、PJ Nos. 7, 12, 15, 18)。

PJ はまた、たくさんのラブ・ストーリーを含んでおり、ヒーローとヒロインは難破のような災難のために別れ別れとなり、東南アジア土着の神・マニ

メーカラー (Maṇimekhalā)²⁹⁾女神によって再会を果たすのである。妻を捜すために担う苦渋の中でヒーローの菩薩の勇敢さを顕示することに加えて、これらの物語はまた、この別離を齎した過去の行為の業の結果を強調することにも役立っている。これら過去の行為の物語は、聖典の物語に跡付けることは出来ず、東南アジア社会独特のモチーフである。いくつかの難破の物語では、むかし夫婦が乞食中の見習僧 (sāmaṇera) の壊れそうなボートを揺らし転覆させてしまう；この悪行が彼らを同じような災難に苦しめることになる、私たちは聞かされるのである。このような半島におけるモチーフは、インド本土に起源を持つ聖典ジャータカの物語には決して見出されなかったものであろう。

これらにはまた、ジャータカ本には見られない特色を持つ動物たちを組み込んだいくつかの珍しい物語もある。それらは、たとえば Setamūsika と呼ばれる白ねずみの物語だったり、Bahalāgavā という正直な雌牛の物語だったりする。前者の物語は聖典の Sasa-jātaka³⁰⁾ (Jātaka No. 316) に似ていて、後者は Suvaṇṇamiga-jātaka³¹⁾ (Jātaka No. 359) とよく比較されるが、両者とも新要素を導入している。彼らの徳を試すために彼らの前に降臨した神の王である帝釈天は、彼らを肉体ごと天へ運び、後に地上に帰している。テラワダ三蔵では、仏陀の甥のナンダが仏陀に伴われて愛欲の楽しみの無益さを教わるために天に行く、というような物語にでくわす。しかしこの聖典では、ただ人間だけが天を訪れる術を知らされている。動物たちが同様に連れて行かれるという事例はない。しかしながら、私たちの物語は、動物たちもこのような超自然的な能力を持っているという、東南アジア独特の考えをほのめかしているようである。

自分の肉体そのまま天へ昇る能力を強調している同様のモチーフは、別の物語である Sirasakumāra-jātaka³²⁾ (PJ No. 38) で機能しているように思われる。これは幼い菩薩に関する異常な物語である。彼の特異な生まれ方が、彼とその母親両者を王国から追放させてしまう。一言も発することなく、彼は数々の奇跡を引き起こし、そして早々と亡くなり、そのとき二人の乙女によって肉体は天へと引き上げられる。菩薩があまりに早くに亡くなること自体特別な出

来事であるが、彼の肉体が天に上ったことはもっと独特である。この物語は、多分誤って罰せられ、その故に菩薩として神格化された赤ん坊に関する東南アジアの民話にその起源をもつものである。ビルマのナツ神伝説³³⁾によっても十分裏書きされる様に、これは、精霊へと変化した男女の物語の敷衍でもありえよう。(Shorto, 1963: 572-91; Spiro, 1967: 40-63, 91-142)。

それらの性格そのものから見て、到底正当なジャータカに含まれ得ない物語も少しはある。それらは仏像の供養とその神聖化に関係する。これらの物語の主要なものが *Vaṭṭaṅgulirāja-jātaka*³⁴⁾ (PJ No. 37) である。かつて仏像の壊れた指を修理した菩薩が王に転生し、自分の指を曲げるだけで百の敵王を征服することが出来たという物語である。この物語は、歴史上重要なものである。なぜならば、最初の仏像がコーサラ国パセーナディ王によって、大師(仏陀)自身の存命中に作られ、この白檀の像は教団の体制を維持するために仏陀自身によって指示されたものであるという中国の求法僧法顕と玄奘の記録を裏付けるパリー文学の唯一の資料であるからである³⁵⁾。

最近発見された *Kosalavimbavaṇṇanā* (Gombrich 1978: 281-303) という26韻文の短い Pali テキストもこの出来事の説明をする。しかしながら、それは *Vaṭṭaṅgulirāja-jātaka* の年代をかなり遅らせることになる。このジャータカはより長いばかりでなく(203韻文)、スリランカの作品に見られない仏像を神聖化すること (consecration) に関して目に見えるような詳細さをも与えている。そのジャータカによれば、ゴータマ仏陀が近づくにしたがい、仏像は命を得、仏像が自ら立ち上がるという場面が、開眼式 (consecration ceremony) より先立って存在している。仏像がそのように命を持つことになるというそれ自体が斬新な考え方であり、この物語においては仏陀自身の威厳を通して起こったこととして説明されている。しかしながら、*Viriyaapaṇḍita-jātaka* (PJ No. 25) という PJ に含まれたもう一つの物語には、新しく神聖化された仏像はその守護霊 (*buddhabimbāraḥkhaḍevatā*: 仏像を守る神々) に憑依されており、そして、それは仏像を通して菩薩に話しかけるのである。ところが、仏像を守るという任務が託されている守護霊への信仰は仏教集団においては決して一般的ではないに

もかわらず、そのような仏像への憑依は甚だ特異であり、かつ東南アジア仏教に吸収されてきたシャーマニズム的な実践にその起源を負っている。

PJ のジャータカが疑経であることを証明してしまういくつかの顕著な物語の諸要素もあるが、それにもかかわらずパーリ仏教文献に重大な貢献をしている。このことは、特に Padīpadāna-jātaka という物語に関してそうである。それは、ゴータマが女性であって Dīpaṅkara 仏から「未来に仏になること」の授記 (byākaraṇa) を受けていなかった時のことを語るものである。ゴータマが苦行者 (tāpasa) Sumedha として Dīpaṅkara 仏と出会うその輪廻より以前のゴータマの人生を示すパーリテキストは、後代の Jinakālamāli を唯一の例外として、他には存在しない。男子の性 (liṅgasampatti) が与えられていることは、仏たるものになるという授記のための八つの必要条件の一つである (Fausbøll, vol. 1: 14)。しかし聖典のパーリテキストはその必要条件を育て上げてきたであろう Sumedha の来歴について何も述べていない。ジャータカ集の序文である Nidānakathā は古い註釈の伝承についてそれとなく言及している (ibid: 43)。すなわち Dīpaṅkara 仏は現在劫 (kalpa)³⁶⁾の最初の仏陀ではなく、さらに 3 人の仏陀たち、すなわち Taṇhaṅkara, Medhaṅkara, そして Saraṇaṅkara によって先立たれていると。

ゴータマの生涯に関するジャータカの記述において、彼らの名前が言及されていないということは、彼がそれら (三仏) から授記を受けていなかったからであると更に付け加えている。Nidānakathā はゴータマの話を現在劫の Dīpaṅkara で始めている。その彼からゴータマは最終的にまさに授記を受けたのであった。したがって、Padīpadāna-jātaka は、ゴータマの前生に関する我われの知識にあるこのギャップを埋めるための試みをしている。すなわち、未来の仏陀がまだ普通の在家女性であった折、菩薩道を始めるための重大な障害であった女性としての再生から、灯明を捧げること (pradīpadāna) によって、如何に永遠に解放されることができたかを示しているのである。その捧げものを通して、その女性は兜率天に生まれ変わった。そこでは、寿命が測り知れないほど長く、そのことがこのエオン (eon)³⁷⁾における最初の三人の仏陀の全て

の時期に、ゴータマがいなかったことを明かに説明している。いずれにしても、経典の記述の精神を冒瀆することなく、Nidānakathāに改良を加えることができたということは、この物語の作者として功績甚だしいものがある。Sumedhaとしての転生より以前のゴータマのことを述べるいかなる Pāli テキストも存在しないとはいえ、大衆部 (Mahāsaṃghika)³⁸⁾の伝承³⁹⁾と考えられる『増一阿含経 (Ekottarāgama)』⁴⁰⁾の漢訳において、Dīpaṅkara より以前の仏陀に彼を結びつけているある物語を我われは見出すことができる。そこでは、ゴータマ (Gautama) は Munī 王女と呼ばれ、仏陀は Ratnākara と名づけられていて、そしてその仏陀の従者は未来に Dīpaṅkara 仏になるという授記を受けていた名の不明な上位の僧侶であった。その仏陀は彼女に、この上位の僧侶は後に彼女の善知識 (kalyāṇamitra) として役立ち、未来に仏 (Buddhahood) になるという授記を彼女に与えるであろうと告げる。これら二つの物語間の強い類似点は、Padīpadāna-jātaka の作者が、自身のジャータカ物語の創作にあたって、『増一阿含経』のサンスクリット伝承本を参考にしたということを示しているように思える (Jaini, 1989)。

これまで、PJ のビルマ伝承本のみが校訂されている。シャムとカンボジアの伝承本もその一部分のみが出版されたところである。これらのテキスト全体の校訂は、東南アジアにおけるこれら地域での仏教伝承についての知識を更に高めることは確実である。ところで、PJ に含まれる物語の累積とは独立して、ほぼ同時期に、同じくチェンマイ地方に起源をもつパーリ語で書かれているもう一つの主要な疑経的な説話の作品がある。この作品は、Mahāpurisa-jātaka とか、もっと日常的には Lokaneya-pakaraṇa (処世のための書；以後 LP と呼ぶ) といった2つの題名で知られている (Jaini, 1986)。それは、もう一つの疑経ジャータカ集であると同時に、また世俗の知恵を扱う文学作品 (pakaraṇa) でもある。

我われの知っている限りでは、バンコク国立博物館にこの物語のただ一つの写本があるだけである。このテキストのタイ語訳の断簡も、同じ博物館で見出すことができたが、この物語はスリランカや東南アジアの仏教教団においては

全く知られないままである。

主として散文で書かれているが、LP は550の韻文を含んでおり、そのうち141は nīti 韻文であると判定され、それらの大半は、サンスクリットに対応するものに行き着きうる。その二つのタイトルが示唆するように、LP はジャータカの形式をとった nīti テキストで、パーリとサンスクリットの仏教文学の歴史におけるユニークな編纂である。

PJ の物語は〔そのひとつひとつが〕独立して、別個のものであるのに対して、LP はそうではなくて、首尾一貫した話の筋を作り出している。こちらの方では、Mahāummagga-jātaka (Jātaka No. 546)⁴¹⁾ 及び Kurudhamma-jātaka (Jātaka No. 276)⁴²⁾ という2つの聖典ジャータカの主旨を、殆どが原サンスクリット韻文のパーリ訳である130以上の nīti 韻文と結び合わせることによって、その匿名の作者が完成したものである。LP の作者は、Mahāummagga-jātaka を用いることによって、この物語の主人公である Dhanañjaya 菩薩⁴³⁾の世俗的な事柄における卓越性の樹立を可能にしたのである。即ち、菩薩をして、王室付きの僧侶や宮廷の相談役、そして敵の王というすぐれた対抗者に、世俗問題での問答にも首尾よく成功せしめたのである。このことは、流布している nīti 韻文の利用可能な蓄えをそのテキストに組み入れるすばらしい機会を与えた。それらの〔韻文の〕大半は賢人 Cāṇakya の収集に由来すると言われており、世俗的知識の要諦であると考えられていた (Sternbach, 1969)。それらの韻文の大部分は、ずっと以前にサンスクリット語からパーリ語へと訳されていたものであり、その後に Lokanīti, Dhammanīti, Mahārahanīti, そして Rājanīti といった、現存の形に編纂されたのである (Bechert and Braun, 1981)。それゆえに、いずれの仏教徒の著者にも、十分に利用出来るようになっていたのである。世俗的な事柄においての菩薩の優越性をこのように確立した後、著者は最後の数章で、王と王宮の役人達の義務について法を制定する Dhanañjaya の能力の考察へと筆を進める。そこでは著者は、信心深い王宮の人々が五つの仏教徒の在家戒 (pañca sīla = 五戒) を良心的に実践していることを述べた Kurudhamma-jātaka を引用している。

宮廷官たちの義務を詳述するために、Rājanīti といった政治に関するこのようなテキストに助けを求めることなく、LP は一部を自らの創作上の天分に、また一部をもはや現存しないほかの文献によっている。このように、LP はこれら両方のジャータカと、広く知られる nīti 韻文を見事に統合し、王室と世間双方に通用し得る世俗的な知恵に満ちた物語を提供した。その編纂は、pakaraṇa (案内書) という表題に適ってはいるが、またジャータカとしても受け入れられることが出来る。何故なら、先に示した PJ の場合と同様に、その物語は古典的なジャータカの形式に従っており、菩薩の智慧の完成 (paññāpāramī) を明らかにしているからである。

LP を通常の Jātaka や nīti テキストから区別するいくつかの特徴がある。もちろん聖典 Jātaka は、智慧の世俗的あり方について論じている nīti 韻文にきわめて類似する韻文を多く含んでいる。しかし、LP の文脈では、nīti という語は特別の意味を持っている。というのは、それは一般に非仏教的なものを起源とするサンスクリット格言韻文のパーリ訳であるそれら韻文に限ってそれを適用しているからである。

この点で LP は、関係が希薄であっても nīti 韻文と語りの散文が微妙ではあるが互いに支えあっている Pañcatantra⁴⁴⁾ また、Hitopadeśa⁴⁵⁾ に似ている。LP に見られる130以上の韻文のうち、わずか50ばかりは著者自身の翻訳であり、残りは上記のパーリ語⁴⁶⁾ の nīti 集から来ている。我われの著者による韻文のこれらのパーリ語訳は、作詩法における熟練を示している。というのは、そのうちの25が、たとえば śārdulavikṛdita⁴⁷⁾, prthvī⁴⁸⁾, vasantatilakā⁴⁹⁾ のようにパーリ詩句に普通に使われていない若干の複雑なサンスクリット韻律を含んでいる。多少興味のあることは、(Jātakamāla⁵⁰⁾ の著者 Āryaśūra と同一の?) Bhadantaśūra という名の仏教徒に帰せられる vasantilakā (LP, No. 326) の中の韻文の一つが Subhāṣitavali⁵¹⁾ という題の14世紀サンスクリット集成にみられるということである (Peterson: 43)。LP は明らかに Vallabhadeva⁵²⁾ の詩選集の韻文を利用した唯一のパーリ作品である。

上述した LP の中で使われた2つの中核となるジャータカ以外に、このテ

キストは、またジャータカ本の中の他の15のジャータカからおよそ40韻文を借りている。それはさらに大きく修正された形ではあるが、Ulūka-jātaka (Jātaka No. 270)⁵³⁾と Amba-jātaka⁵⁴⁾ (Jātaka No. 474) のすべての話を事実上引用している。もちろん、そのような借用の原典資料について何も確認できない。なぜなら、LP には、仏陀が自分の物語を自分の口で語ることが内意されており、彼が相互に相反する自分の物語を参照することは通常予期されないからである。我われの著者は疑經 Jātaka の PJ 集から二つの物語を同様に参照する。一つは Bahalagāvē の物語で Bahalaputta-jātaka (PJ No. 33)⁵⁵⁾ に対応する。もう一つは Pankajadevē の物語で Soṇanandarāja-jātaka⁵⁶⁾ (PJ. No. 39) に大変似ている。これらの場合も同様に、PJ の名前は記されていない。しかし、類似した点があまりに顕著で、直接の借用が明らかに予想されるのである。LP と PJ 間のこれら近縁関係は、LP が、PJ を形作る物語が創作された後、しかも正式な PJ 集成として編纂される前に、書かれたことを示すように思われる。

LP がジャータカ本のタイトルを述べないのはむしろ異常ではあるが、比較的重要でないパーリテキスト Majjhimaṭṭhakathā⁵⁷⁾ のタイトルには言及している。その人生が三帰依の唱和によって救われたという Soṇa Hatthipāla⁵⁸⁾ についての話しの語り口で、LP の著者は彼の語り口が Soṇa の物語のほんの要約に過ぎず、その詳細は Majjhimaṭṭhakathā に出てくると記しているのである。これは LP 全体で、名前の出てくる唯一のパーリテキストである。いずれにせよ Soṇa (Hattipāla) の物語は現存のテキスト版に跡付けることができないだけでなく、またかの在家者はパーリ文学のどこにも知られていないのである。〔LP の〕著者による〔作品の〕属性が間違っていないと仮定すると、それを信頼することはかなりの飛躍ではあるが、LP の著者は目の前に、もはや現存しない Majjhimaṭṭhakathā の異なった伝承本を持っていたということはあり得る。ひょっとしたらそれは Buddhaghosa (Norman : 122) の時代から別に知られていた古代の Sīhala-aṭṭhakathā⁵⁹⁾ そのものであったかもしれない。

このことに関連して、我われは、上座仏教の国で広く知られている “iti pi so bhagavā” (世尊はこうであられた) という典礼文 (liturgy) についての著者

の興味深い用法について簡潔に言及しておこう。菩薩から夜叉に与えた教説を著者が記述する箇所での典札文を提示するが、一方で我われの著者は典札文それぞれのシラブルを使いながら沓冠詩 (acrostic)⁶⁰⁾を創作している。これら7種類の韻文は確かにパーリ文学では独特であり、その詩人の詩的な才能を示している。この典札文の流布から見て、南・東南アジアの仏教徒もまたこれら韻文に慣れ親しんでいることが窺われうる。しかしながら、驚くべきことに、その沓冠詩はどこにも引用されることもなく、これらの地域のどの仏教教団にも知られていない。このことは、LPが上座仏教教学のいずれのセンターにも流布しなかったことを改めて示している。

話そのものの要素に目を向けると、Mahāumagga-jātakaはその中に次のような枠組みを用意している。すなわち、我われの著者は、シヴァ教 (Śaivism) の信者とみられているバラモン教の宮廷司祭 (prohita) と、とても若い仏教を支持している商人の息子 Dhanañjaya 菩薩⁶¹⁾との間に、緊張関係を作り上げているのである。LPの主要な目的の1つは、14世紀に起こった⁶²⁾シャムとビルマのシヴァ教徒化した宮廷のバラモンたちのシヴァ教を押さえて⁶³⁾、仏教が結果的に勝利したその間の闘争を示すことであるように見える。問題にしている話では、うち負かされた宮廷司祭は、ついにシヴァ教を見捨て、かわりに仏教への忠誠を宣言して、仏教の教えによる司祭 (purohita) としての職務を彼に教えることを菩薩に乞うのである。これらの職務は世俗的なものであるが、戒を保つ仏教の精神で実行される必要があったことから、菩薩は、Kurudhamma-jātaka⁶⁴⁾の例に見るように、適切な nīti 詩を誦することによって、彼を教化することができるのである。

菩薩の優れている知恵を証明するにあたって、我われの著者は、誰をも、まさに尊崇された比丘僧伽さえをも、気にかけることはなかった。Malatarapañha (より一層不浄の問い) と呼ばれる LP の第2節で、王と教団の間に起こった対立が語られている。森林での狩の遠征の間、王は、Nandi という名の夜叉 (yakka) の小さい林に到着した。〔その夜叉は〕7日間中に、最も心を悩ます事 (より一層の不浄) に関わる彼の質問にうまく答えることが出来な

い限り彼を殺すと脅す。王は首都へ帰ると、始めに王の大臣達に答えを尋ねた。彼らが答えられなかったので、王は、⁶僧団の王 (Saṅgharāja)、によって導かれた比丘僧団に相談した。彼らがまた答えることができなかったので、王は彼らをたしなめた。「尊敬すべき人たちよ！きっと、聖典の専門家 ganthadhura であるあなた達のような托鉢者は、これを理解できるはずだ！何故、あなたは理解しないのか」と。返答を求めて七日後に戻ってくると約束して、王は（僧団を）離れた。その（約束の）夜に、王はもったいぶって再び僧団に近づいて、彼らを非難した。「師よ、もしこれらの質問にあなたがたが答えられないとしたら、あなたがたのような頭の鈍い者達が私にとって何の得になろうか」というと、ついに王がうんざりして去ってしまうまで、僧団全体は硬直して黙ったまま座っていた。この対立場面は、もちろん尋ねられた質問の答えの難しさを示すためである。従って結局は答を与えることになる若い菩薩の名声を高めるために紹介されている。たとえそうだとしても、パーリテキストにおいて、そこにもたらされる文学的、物語的な事柄とは関係なしに、僧団、特に Saṅgharāja に対する明白な非難に出くわすことはめったにない。

上にあげた例のように、我われの著者は、場面の選択において、相当の大胆さをしばしば示しており、それはまた彼の創造性を示している。これは、一夫多妻制よりも一夫一妻制の優位性を彼が驚くほど弁護することにおいて、特に顕著である。LP は、菩薩が、王から第二婦人として姫の提供を受けることを拒否したパーリ文学における唯一の場面である。菩薩の拒否は、すでに彼の最初の花嫁である Kalyāṇī と幸せに結婚していたので断ったのである。その後、Kalyāṇī は、彼女が菩薩と結婚していた時の彼女自身の過去世物語を語る。その〔過去世の〕間、彼女は仲間の妻たちの手にかかって大変苦しんだ。そして、菩薩はその時、二人目の妻は決して二度と持たないことを誓ったとされる。この姿勢はもちろん、東南アジア仏教徒の全ての国々、特にシャムやビルマにおいてまさに共通している一夫多妻制の習慣と衝突した。そのような環境において、仏教徒の語り手が偉大な菩薩に相應しい美德として、一夫一妻制を支持しようとしたことは、確かにユニークな刷新であった。その刷新は、彼自身の最

後の生涯にわたって、ただ一人の妻ヤショーダラーだけを妻にし続けたというゴータマ自身の例によって触発されたというように思われる。

しかしながら、おそらく LP の最も重要な貢献は “Kurudhammapañha” と題される部分における王宮の責務についての長い論述である。先に言及したように、聖典ジャータカ本の中の短い Kurudhamma-jātaka⁽⁶⁵⁾ は、この部分に枠組を与えている。そのジャータカにおいて “kurudhamma” という言葉は在家者によって五戒を保つことに当てられている。そして、如何にして王宮の王、皇太后、王妃、皇太子 (uparāja)、司祭 (purohita)、土地監視人 (rajjuka)、戦車の御者 (sārathi)、財務官 (setṭhi)、収税官 (doṇa)、門衛 (dovārka)、遊女 (gaṇika) の十一の構成員が勤勉にそれらの戒を守っているか、しかし、なお彼等はそれら〔五戒〕を守ることに十分周到ではなかったと考えていたことが述べられている。これら王宮の者達の責務は著者によって大幅に発展させられたのであり、そして彼の語ることはパーリ文学のどこにも確認することはできない。とりわけ顕著なのは貨幣制度 (kaḥāpana) についての長い説明を含む財務官についての部分である。同じく重要なのは、土地監視人と収税官の責務の取扱いである。その両者は、税法を適応する際には公平に、一方では一般大衆の権利を、一方では王宮の要求を侵害することがないように、注意力をよくはたらかすように警告される。最後に遊女の責務について言及しなくてはならない。Kurudhamma-jātaka によれば、遊女は全ての客に対して絶対的に平静さを保持する事によってのみ、あさましい職業に従事している間でも五戒を守ることができた。しかし、第 4 番目の戒、不品行な性行為 (kāmesu micchācāra, 邪淫) を慎むという彼女の能力を擁護しようと試みるパーリテキストは他にない。LP の著者は大胆にも、この問題を取り上げ、彼女のところへ常に出入りする男の妻達が、〔彼女にとっては〕当然である性行為の放縦さの故に遊女を非難することを記している。我われの著者はこのことに対し、彼女はとがめられることはないと回答する。彼女の役割は渡し守に譬えられる。彼は船を所有し、穏やかに操作するが、それに乗客の間に起こるかもしれない如何なる争いにも何ら責任がない。同様に、遊女のせいで、配偶者の間で生じる

かもしれない如何なる内輪もめがあろうとも、遊女はそのことに対し非難すべきであると考えられることはない。それゆえ、他の在家者と同様に遊女は戒を維持する事ができるのである。

PJ と LP の両者は匿名の著者によるものである。このことは予期されることである。なぜなら、新しいジャータカを書こうと意図する者は、そのような物語の疑經的性質をうっかり現すかもしれない作者や、その出所の全ての痕跡を覆い隠さなければならなかっただろうからである。実際、パガン、タトン、ハリプンジャヤ、そして、スコータイのような地域の主要な都市の名前は欠けていることが目立ち、ビルマとシャムのパーリ年代記に現れる町でさえ失われている。その物語はどちらもビルマもしくはタイの王達の名にも言及していないし、歴史上重要な事をほのめかしてもいない。例えば、それはいくつかの地域を悩ました絶えまない戦争とか、ランカ⁶⁶⁾からの高名な僧の到着 (Jinakālamālī と Sāsanavaṃsa といったそのような年代記において報告されたような) といったことなどである。Suvṇṇakumāra-jātaka (PJ No. 40) における、今日スリランカとして知られるシーハラ・ディーパに関する物語⁶⁷⁾は、島が仏教徒でない王、Bhaṭṭosura によって支配され、そしておそらくは Rāvaṇa という悪魔の王とランカの伝説的繋がりを思い出させる時代に立ち戻る。しかしながら、この論及には歴史的価値はないようである。可能性として、チェンマイでおよそ1430年あたりに行われた、ある主要な出来事（それはおそらく、Laṅkavaṃsa と呼ばれる Sīhala 学派の樹立である）を原因として、島は言及されたのかもしれない (Le May 1954: 187)。たとえそうであっても、PJ あるいは LP において、セイロンのサンガや有名なセイロンの仏像のいずれにも言及されていない。双方のテキストは、ビルマの伝説的な名である Suvaṇṇabhūmi⁶⁸⁾ に言及し、LP は特におそらく、チェンマイの別名である Biṅgarattha と同一である Bhaṅgarattha (または Ābhaṅgarattha) と呼ばれる王国に言及する。LP は、もちろん信じがたいことであるが、その国の王 Ābhaṅgarāja を Haṃsāvati と Dvāravati という古代都市の創立者として言及する。このことは、もちろん不可能であるが、これら二つの古代都市草創の記憶がこの著者の心中

にまだ新鮮であったことを示しているのである⁶⁹⁾。

結 語

シャム・パーリ年代誌：Jinakālamālī (Buddhadatta: 1962) の出版以来、13世紀および14世紀に起こったスリランカの僧団と東南アジア諸国との交流について非常に多くのことがわかるようになった。Sihalaḥimba と呼ばれるセイロンから持ち込まれた不思議な仏像と、王室権威の正統性を裏付けるこの像を中心とした祭式崇拝の復活の両者について、同書は、貴重な情報を提供してくれた。このように、ビルマならびにラオス・カンボジア・シャムの諸王国両者で花開いたさまざまな仏教王朝の宗教的・政治的な事蹟についてかなりの新しい情報が拾い集められた。これら相互の交流は、文学活動における大いなる復活を、宮廷のみならず、同様に活力のよみがえった僧侶階層にも引き起こしたのである。それは、Bechert および Braun の Pāli Nīti Texts of Burma に見られる通りである。その物語集成は、これらの国々の僧侶が熱心にインドに起源を持つサンスクリット格言文学を研究したのみならず、パーリ語に翻訳し、かつ彼ら自身の作品に同化吸収したことさえも示している。

PJ および LP という東南アジア佛教の二つの主要な疑難説話物語の発見は、博識の廷臣と僧院社会を越えたところまで、われわれを連れて行ってくれる。これらのテキストの中に、我われは、本来的に世俗的でもあり宗教的でもあるがゆえに、佛教の研究者のみならず東南アジア文化一般の学者にとっても、価値ある物語を見出すのである。実際、これらは固有土着文化の様々な特異な局面を理解する上で、唯一現存する信頼できる情報源であると思い切って提言してもよい。〔ここにいう土着文化とは、〕固有な伝説や神話上の生きものたち、厳重な一夫一妻制社会が作る緊張から生じた情熱的な愛の物語、兄弟相争う戦争や危険な航海の冒険、慈悲や誠実さの仏教徳目を啓発するための宮廷の教権制度と宗教的欲求、そして三宝 (tiratana) へのゆるぎない信仰のことである。よみがえった仏教徒達の布教への熱意は、一般人の中に入って改宗活動に従事した僧達に個人的裁量の余地を多分に許容することを必要とした。この目的から僧達には、彼らの大衆向け説教において、ジャータカ本、特に

Vessantara-jātaka にある膨大な量の物語素材を十分に利用する自由が与えられた。佛教僧たちは反復して、このような聖典ジャータカを彼らの文学創作のモデルとして用いた。それは、彼らの深い信仰を表現せんとして、彼らが無限に仏像や仏塔を繰り返し作るのとまったく同じである。熱情と気力（行 = saṃskāra）を持って反復される行動力への仏教徒の信仰は、日々僧達が在家者達に執り行う三帰依（tisarāṇa）の唱和や五戒（pañcasīla）の定式を繰り返す単なる口誦行為を超えるものであった。それはまた、あらゆる時代の在家仏教徒にとって新しい仏像を造り新しい仏塔を建てるのが、新たな功德を積む証しであったという信証であった。新しいジャータカ物語、そしてその中でも、特に Vessantara-jātaka に直接に範を採った物語を創作する際に影響を与えているように見えるのは、まさにこれと同じ考え方なのである。かの聖典物語は、疑經ジャータカ集成を編成するための中核となっていたと思われる。しかし、これらのジャータカを書き上げた僧達——もしそれらの作成者が在家であったとしたら実に奇妙ではあるが——そしてそれらを聴聞し上演させしめたその在家者たちにとっては、それらの物語がにせものでないのは、新しく作られた仏像や仏塔がにせものでないのと同じであった。ひとたびその中核が固定されれば、仏教徒たちが彼らの地元で流布しているのを見たその他の物語は、成長する集成の中に次第に同化されていったのである。これら外からの源泉資料は、例えば Pañcatantra や Hitopadeśa から採られたバラモン教の寓話、あるいは上座部に起源を発する仏教徒の物語であった可能性がある。また、東南アジア諸地域から出ている素材であることがわかるかもしれない。例えば、それはある地域、ある時代、あるいはある人物と結びつけて考えられるかもしれない。これらの新しい要素は、徐々にこの物語集成を豊かにし、人気のあるジャータカの数を増やしていったであろう。

明らかに正統な聖典集成の部外にあるにもかかわらず、これら疑經ジャータカ集成の尊厳は、在家者の目の中で品格を落とすことはなかった。それゆえに我われは、伝統に基づいた正教を維持しようとする東南アジア仏教の伝統、その仏教伝統が、このような明らかににせものの作品を流布させることを許しえ

たことがどうして有り得たかを問うてもよいかもしれない。そこに含まれている物語と聖典ジャータカとの構成上そして主題上の類似は、それ自体では、人々がこのような特典を受ける十分な理由とはならないであろう。私の考えでは、これらの物語は、それらが佛教教説 (satthusāsana) の精神、即ち仏教徒自身がテキストの真正を判断するために設定した究極の規準を破っていないことを理由として、主として例外とされたのである。これらの物語を調べても、聖典ジャータカ本そのものにまで遡ることができなかったということは事実である。またこれらは、疑わしいテキストが聖典として認められるために満すべき最初の条件である経蔵や律蔵の中にも見出せないのである。それは長部 (Dīghanikāya)・大般涅槃經 (Mahāparinibbānasuttanta) においてブッダ自らが、四つの真正なる規準 (mahāpadesa) を論じたとき設定した規準である⁷⁰⁾ (Rhys Davids & Carpenter, 1975 : 123-4)。これらの物語が引き出された多様な源泉資料にもかかわらず、彼らの教えの精神が明白に佛教に留まっていたことから、それらは聖典ジャータカを補足するものとして認められた。このようにして、僧伽自体はそうでなくても、これらの疑経ジャータカは、在家者たちから大いに尊ばれることとなった。実に、僧達は疑いなくそれらが偽物であることを知っていたし、決して聖典ジャータカ本に統一しようと試みたことはなかったように思われる。ただそうであったとしても、これらの物語のヒーローが菩薩である限り、またブッダの教説に著しく反するものがそれらの内容を汚してしまうことがない限り、信心深い在家の人々を教化するその価値は揺るぐことはなかったのである。

略号

JA : *Journal Asiatique, Paris.*

BEFEO : *Bulletin de l' Ecole française d' extreme orient, Paris.*

BSOAS : *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, London.*

参考文献

Beal, Samuel. 1888. *Buddhist Records of the Western World*, Vol. 1. Reprint ed. New York : Paragon Book Reprint Corp., 1968.

Bechert, Heinz and Braun, Heinz(eds.) 1981. *Pali Niti Texts of Burma*, London : Pali Text Society.

- Bollee, W. B. (ed. and trans). 1970. *Kuṇāla Jātaka*, London : Pali Text Society.
- Buddhadatta, A. P. Ven. (ed.). 1962. *Jinakālamālī*, London : Pali Text Society.
- Damrong, Prince. 1956. *Panniyāt Chadok*. 2 Vols. Bangkok : National Library.
- Fausbøll, V. (ed.). 1896. *The Jātaka (Together with its commentary)*, 6 Vols. London : Pali Text Society.
- Ferr, L. 1875. "Les Jātakas", *JA*, 7e Ser. V : 417ff.
- Finot, L. 1917. "Recherches Sur la litterature Laotienne". *BEFEO*, 17-5 : 44-50.
- Gombrich, R F. 1978. "Kosala-Bimba-Vaṇṇanā" in Heinz Bechert (ed.), *Buddhism in Ceylon and Studies on Religious Syncretism in Buddhist countries*, Gottingen.
- Institut Bouddhique (ed.) 1953-62. *Paññāsa-Jātaka* 5 Vols. Phnom Penh.
- Jaini, P. S. 1966. "The story of Sudhana and Manoharā. An Analysis of the Texts and the Borobudur Reliefs", *BSOAS*, 29 : 533-58.
- Jaini, P. S. 1979. "On the Buddha Image", in A. K. Narain, (ed.), *Studies in Pali and Buddhism*, Delhi ; B. R. Publishing Co.
- Jaini, P. S. 1981-83. *Paññāsa Jātaka or Zimme Paṇṇāsa*, 2 Vols. London : Pali Text Society.
- Jaini, P. S. (ed.), 1986. *Lokaneyyappakaraṇam*, London : Pali Text Society.
- Jaini, P. S. 1989. "Padipadāna-Jātaka, Gautama's Last Female incarnation", in N. H. Samtani and H. S. Prasad (eds.), *Amalā Prajñā*, Aspects of Buddhist Studies, P. V. Bapat Felicitation Vol. Delhi : Sri Satguru Publications.
- Jaini, P. S. and Horner, I. B. 1985-86. *Apocryphal Birth-Stories*, 2 Vols. London : Pali Text Society.
- Jayawickrama, N. A. 1969. *The Epochs of the Conqueror*, London : Pali Text Society.
- Le May, Reginald, 1954. *The Culture of South-East Asia*, London : Pali Text Society.
- Norman, K. R. 1983. *Pali Literature. A History of Indian Literature*, Vol. 8, Fasc. 2, Wiesbaden.
- Peterson, Peter (ed.) 1961. *Subhāṣitāvalī of Vallabhadeva*, Bombay Sanskrit and Prakrit Series, No. 32. Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Quaritch Wales, H. G. 1931 *Siamese State Ceremonies*.
- Rhys Davids T. W. and Carpenter, J. E. (eds.) 1903. Reprint 1975. *Digha Nikāya*, Vol. 2. London : Pali Text Society.
- Shorto, H. L. 1963. "The 32 myos in the Mediaval Mon Kingdom" *BSOAS* 36 : 572-91.
- Spiro, Melford, E. 1967. *Burmese Supernaturalism*, Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice Hall.
- Sternbach, Ludwig, 1969. *The spreading of Caṇakya's Aphorism over greater India*, Calcutta : Calcutta Oriental Book Agency.
- Terral, G. 1956. "Samuddaghosa Jātaka : Conte Pali tire du Paññāsa Jātaka," *BE-*

Winternitz, M. 1933. *A History of Indian Literature*, Vol. 2, Calcutta: University of Calcutta.

(本稿は、平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C-2〈研究代表者：田辺和子〉による研究成果の一部である。)

☆本稿は、“The Apocryphal Jātakas of Southeast Asian Buddhism” by Padmanabh S. Jaini (*The Indian Journal of Buddhist Studies* Vol. 1 Number 1. 1989, pp. 22-39) の翻訳に若干の訳者注を付したものである。なお、この後、本論文は、*Collected Papers on Buddhist Studies*, ed. by Padmanabh S. Jaini, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 2001, pp. 375-398 に採録されたが、該稿には若干のミスプリントや脱落が認められるので、参照にとどめ、翻訳は前者により、(原注)は著者による修正部分があるので、後者によったことを明記しておきたい。

☆ 本稿の原著者 P. S. Jaini 博士は、Professor of Buddhist Studies at the University of California at Berkeley であったが、最近、定年でリタイヤされた。本稿〈参考文献〉における諸著書諸論攷の他、*Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti* (Patna, 1959)の校訂者としても有名である。

＊ 本訳は、筆者が2000～2001年度、及び2003年度の大谷大学大学院「地域文化研究2」において、院生とともに当該論文を輪読・翻訳し、その成果をまとめたものである。なお、末注は(原注)としてあるもの以外はすべて、受講生の協力により訳者が注記したものである。当時受講していた院生諸氏、ことに清水洋平(現任期制助手)及び村西弘行(現博士後期課程)両氏の協力に謝意を表するものである。

- 1) (原注)本論文は、1984年10月16日アメリカ合衆国ペンシルヴァニア州フィラデルフィアに於いて開催の第6回世界サンスクリット会議 第17部会「仏教・ジャイナ教研究」に提出されたものである。
- 2) 『ミリンダ王の問い』として知られるこの経典は紀元前2世紀頃、西北インドを支配していたギリシア人の王 Milinda (メナンドロス) と仏教論師ナーガセーナ長老とが仏教教理に関する問答を行い、ついに王が出家し阿羅漢になった終始を討論形式でとりあげたものである。ギリシア的思惟と仏教的思惟の対比という点でも興味深い経典である。スリランカでは三蔵中に含めないがミャンマーでは含める。
- 3) 『指導論』というような意味で、経典を解釈するに際して様々な観点から検討し、経典の意味を誤りなく後世に伝えると同時に、経典本来の目的が何であるかを反省せしめる論書である。西暦紀元前後の成立と考えられている。
- 4) 『弁別の道』というような意味の論名で、小部成立後の2世紀後半以降に編集されたと見られる。論母(要旨)と解説からなるアビダルマ論書の形式がとられ、仏教の重要な教説についての解説がなされている。
- 5) 仏教聖典は経 (Sutta) 律 (Vinaya) 論 (Abhidhamma) の三蔵よりなる。南

伝三蔵の経部には長部 (Dīgha-nikāya)・中部 (Majjhima-nikāya)・相应部 (Saṃyutta-nikāya)・増支部 (Āṅguttara-nikāya) 小部 (Kuddaka-nikāya) の五部がある。

- 6) 5世紀頃、南インド出身のスリランカの有名な論師 Buddhaghosa が *Vimuttimaggā* (漢訳『解脱道論』と一部チベット訳でしか現存しない) の註釈という形で南伝仏教の教説を大系的にまとめて解説した重要な論書。
- 7) 『大王統史』と訳され、5世紀以降、13世紀の始めまでのスリランカ仏教の歴史を編年史的史詩にまとめた書。仏教成立以来4世紀頃までの王統史をまとめた *Dīpavaṃsa* (『島史』) に準じて編集されたものである。
- 8) チェンマイの僧 Ratanapañña 長老が1528年にパーリ語で著した史書。パーリ語史書の伝統に倣って、前半はインド・スリランカの仏教史で占められ、後半ではハリブンチャイ、ランナー・タイへの仏教伝来史が語られている。重要な北部タイ史資料とされる。
- 9) 12世紀頃スリランカの Anuruddha の著したパーリ仏教教理綱要書中の白眉。
- 10) 5世紀頃 Buddhaghosa の著した *Dhammapada* の註釈書で、その中には註釈だけでなく、関連する多くの物語を含む。
- 11) スリランカに伝わる古くからの物語の多くを集めたもの。
- 12) 10人の未来仏たる菩薩の出現について、とくに弥勒菩薩について詳しく述べる、大乘仏教の影響の大きい作品である。
- 13) (原注) L. Feer, (1875: 417) ビルマ校訂本テキストは本著者が編纂 (Jaini: 1981-83.)。英語訳が I. B. Horner によって開始され、本著者により完成された (Jaini and I.B. Horner, : 1985-86)。
- 14) スリランカで記された *Mahāvamsa*、および後の *Gandhāvamsa* (AD: 17世紀) ならびに *Sāsanāvamsa* に、東南アジア (特にビルマ) でのテーラワーダ佛教の歴史に関し重要な情報が含まれている。
- 15) ミンドン王 (即位1853年)。ビルマ文字版パーリ三蔵および義疏の整備・編纂を計った (マンダレー結集1871年)。これらを貝葉などに記すだけでは満足せず、大理石版729枚に刻記し、マハーローカマーラゼイン (Mahalokamarajin) に安置した。
- 16) Prince Damrong Rajanubhab (1862~1943)。ラーマ5世の異母弟。兄を補佐し行政の近代化に絶大な貢献を行った。また学者としても「タイ歴史学の父」といわれ、タイ史研究を近代的学問の水準に高めた。その重要な業績の一つは、手写本のまま死蔵されていたタイ語文献を収集し、自ら解題を執筆して出版したことである。ダムロン親王の努力で刊行された文献資料はいずれもタイ史研究の基礎文献であり、現在もお広く研究者の間で利用されている。
- 17) *Paññasajātaka* (Pannyāt Chadok), chabap, Ho samut haeng chat (= National Library edition of the Paññasajātaka, Thai translation, Part I-II, Bangkok, Silpabannakarn Press, BE 2499 [CE 1956] 訳者所見の当該書はその再版か?)
- 18) *Ganthamālā Paññasajātaka Texte Pāli*, Phnom-Penh: Institute Bouddhique,

1953.

- 19) Samuddhaghosa という王子と Bandhumatī という妻の恋愛物語。
- 20) Suddhana と Manoharā の恋愛物語。インドから日本にまで伝わる羽衣伝説に関わる作品である。
- 21) 『大事』とも訳され、大衆部系説出世部の律藏から、仏陀の前生譚と仏伝物語を抄出したジャータカ・アヴァダナーが増広発展し独立したと考えられる。
- 22) 根本説一切有部に属するサンスクリットの譬喩文学中、最も重要な作品で、全38章よりなる。3世紀頃に編集されたと推定され、大乘仏教成立過程の研究上にも興味ある經典である。
- 23) 「マノーラ物語」。タイでは、ラコーン・ノーラ（ノーラ舞劇）として演ぜられる。ヒーロー、ヒロイン、道化の3種で、男性のみによって演じられ、スートという冠、手につける爪や衣装が特徴的である。アユタヤ朝（1351～1767）にはすでに成立していた。
- 24) （原注）詳細は次を参照。Jaini, (1966: 553-8).
- 25) ジャータカの註釈書であるが、一般にこれを『ジャータカ』と呼んでいる。
- 26) （原注）一般的には、ジャータカ物語に現れる偈の数はその長さを示している。聖典のジャータカは23の本に分類される。（その本の）ある物語にみられる偈の順が増えていく法則がある。例えば5つの偈が（入った物語は）第5番目の本を構成し、20の韻文が（入った物語は）第20番目の本をかたちづくっている。Paññāsaj Jātaka の編纂者はそれらの（物語の）ならべる順番に従ったようにみえない。
- 27) （原注）何が正確にジャータカを構成しているかどうかということや註釈が本物として受け入れられるべきかどうかについての論争。L. Feer: 1975; M. Winternitz (1933, Vol. 2: 113-25), B. Bollee. (1970: Introduction) を参照。
- 28) この物語はアリンダマ王とその妻の物語である。帝釈天が年老いたバラモンの装いで登場し、アリンダマ王は自分の王国や二輪戦車を与え、またそのバラモンに金を与えるために自分の妻をも隷属に売る。

一方、隷属の中の妻は死んだ息子に生命を与えるために、今や墓守となっているアリンダマ王に近づく。そしてアリンダマ王は息子を生き返らせるために真実の行為をしたので、直ちに帝釈天が現れ、その息子を生き返らせる。そしてアリンダマ王は未来に仏陀になると宣言する。

※Vipassi 仏の時に菩薩であったアリンダマ王は、この物語のアリンダマ王と全く同じではない。
- 29) 四天王より、若し三帰依者または持戒者がいて、難船したときには助けるべしという命を受けて、海を護るために置かれた一天女。インド南部より東南アジアにかけてその信仰があった。
- 30) ウサギ前生物語：ウサギとして誕生した菩薩が、その身を焼いた肉で帝釈天が変化したバラモンに供養しようとする物語。
- 31) 金色の鹿前生物語：金色の鹿に生まれた菩薩が獵師の罠にかかり、妻の雌鹿が

- 獵師に自分の命を引替えにして鹿王を助けてくれと懇願する。鹿王を放してやった獵師は、礼として宝石を与えられる。
- 32) Sirasakumāra 菩薩は母親の口から吐き出されて生まれてきたという。そのため王国から追放され、飢饉の中で生きなければならなかった。菩薩はのちに大臣の苦勞により母ともども王国に戻るが、突如として彼は天に昇ってしまう。
- 33) 仏教流入以前からビルマに存在していた土着の信仰対象。もとは実際に存在していた人間だったものが、悲劇の死を迎えてナツ神になると言われる。
- 34) 仏像の壊れた指を修理した菩薩が、ベナレスの王に生まれ変わる物語。ジャータカ序文のNidānakathāには、コーサラ王が白檀で仏陀像を作ったと言う記述があり、これはほぼ法顯の記録と同様であるという。
- 35) (原注) 中国の求法僧 (pilgrims) については, Samuel Beal, xlliv, 235-5. 参照。また、それについて詳細は, Jaini, 1979, 183-188. にある。(訳者注) 長沢和俊訳注『法顯伝・宋雲行紀』東洋文庫・1979, p. 68, 水谷真誠訳『大唐西域記』中国古典文学大系22 (平凡社・1981年初版) pp. 178-179. 参照。
- 36) 周期的な時間の長さをいう。輪廻の一時期をいうことあり。
- 37) 計り知れない長い時間; 10億年の年代区分の単位である。
- 38) 摩訶僧祇部、大衆部、多僧部など言われる仏教部派の名前。部派仏教の中でも比較的革新的な考えを持つ派。釈尊滅後、小乗二十部の分裂のうち、最初の二大部の一つ。上座部に対する、滅後百年、大天 (Mahadeva) という比丘が提唱した五ヶ条の教義に賛同した改革派の集まりであり、これはより自由派であった。
- 39) (原注) 『増一阿含經』第38卷, I: 125. 大正 2, 757b-758c 参照。
- 40) Pali 經典の Anguttara Nikāya に当たる漢訳の經典であるが、全く同じではなく、部分的に異なっている。
- 41) Mahāummagga-jātaka 仏陀が比類なき最高の賢者マホーサダであった時の前生譚。ミティラー国 ヴェーデーハ王の時世、マホーサダは偉大なる賢者として、7歳にして広く名を知られていた。王は、自分の元に賢者を召し抱えようと、19の問答をもって賢者を試す。見事、全ての問で王を満足させた賢者は王に仕えるようになる。ある時、王は敵王であるチューラニー王の城に招かれる。チューラニー王はヴェーデーハ王を歓待するが、それは彼を討ち取る為の罠であり、城の外ではヴェーデーハ王の首を取ろうと兵達が取り囲んでいた。そこで賢者は知恵をもって、王をトンネル (ummagga) より城外へと脱出させる。そしてヴェーデーハ王亡き後、賢者は請われてチューラニー王に仕えるようになった。
- 42) Kurudhamma-jātaka 菩薩がクル国王ダナンジャヤであった時の前生譚。旱魃に悩むカーリング国王から、菩薩が実践するクルの国法である五戒を金板に刻むよう頼まれる。しかし自分が完全に戒を持しているかどうかを悩む菩薩は、戒を刻みはするものの、己よりよく戒を実践しているであろう母後の所へカーリングの使者を向かわせる。同様にしてクル国の11人の人々を巡り歩いた使者達は、それぞれの人が戒を刻んだ11枚の金板を自国に持ち帰った。そしてカーリング国王がその五戒を実践すると、国中に雨が降り、国は安泰で豊饒となった。Jaini 原文で

は No. 267 となっているが、276 のミスプリントと思われる。

- 43) 上記梗概でも分かる通り、ダナンジャヤ菩薩が主人公であるのは、Kuru-dhamma-jātaka の方である。他のジャータカにもダナンジャヤという人物は登場するが、ここでの趣旨には相応しない。おそらく賢者マホーサダを指しているのだろう。
- 44) 寓話、説話、格言の形で政治の術、一般の処世術を考えようとする書物。もともと王子の教育としてのもので、後に青年一般に対する教育書となった。
- 45) 利益の教授というような意味をもつ大衆文学作品で、Pañcatantra のあらゆる新しい改作本のなかで一番重要なもので、9 世紀以後から 14 世紀以前の間につくられたとされる。
- 46) 原文では "Pati" となっているが、Pāli と修正して読む。
- 47) サンスクリット文学における詩の韻律で、19 音節 x 4 パーダよりなる。
- 48) サンスクリット文学における詩の韻律で、17 音節 x 4 パーダよりなる。
- 49) サンスクリット文学における詩の韻律で、14 音節 x 4 パーダよりなる。
- 50) 2 世紀頃、古来よりのジャータカのいくつかを選び、その伝承を忠実に、大綱を変えたり、本質を変えたりすることなく、サンスクリットの文学作品として仕上げたもの。35 のジャータカよりなる。
- 51) Vallabhadeva の作品で、16 世紀にシャルンガダラパッティ（シャルンガダラの詩への案内 1363 年）を利用しつつ編集されたとされる。
- 52) 16 世紀頃のインドの詩人で、Subhāṣitāvalī というきわめて浩瀚な詩集を編集した。これらの詩句は編者自身のものか、他の引用かははっきりしない。
- 53) この物語の内容は次のようなものである。師から季節外れに果実を得るという呪文をデーバダッタは得たが、師との約束を破り呪文は消え失せ、再び呪文を得ようと請うが得られなかった。後に、男は林に分け入り、のたれ死んだ。
- 54) むかしフクロウが鳥類の王に選ばれようとしたとき、カラスが反対したため、両者は争うようになったという物語。
- 55) このジャータカは、菩薩が Bahalaputta として生まれ、忍辱波羅蜜を修したとされる物語である。
- 56) このジャータカは、過去世の如来に対して、意地悪の婦人によってなされた不正な誣告を説明することを目的とした長い恋愛物語である。
- 57) 南伝のパーリ大蔵経中の Majjhima-nikāya（中部経典）の註釈であり、Papañcasūdanī と称される。
- 58) ペナレスにおける Esukari 王の子で佛の前生である菩薩。佛はこの生において大国を捨て出離波羅蜜を修める。
- 59) 紀元前 3 世紀頃、マヒンダ長老がセイロン島にパーリ語で伝えたと言われる聖典の中の註釈文献が古代シンハラ語に翻訳されたとされる。その聖典を Sihala-aṭṭhakathā と呼ぶが、現存していない。
- 60) 一種の文字謎で、各行頭の文字をつづると特定の言葉となるような詩。
- 61) ジャイニは Dhanañjaya と書いてあるが、実際は Mahosada の間違いであろう

(本注43参照)。

- 62) (原注) これらシヴァ派のバラモンたちが、秘密の何かを残していたのである。LP (第70偈) におけるほんの1行が、南インドのドラビダ人に関係していることは明白である Damila たちに言及している。このことは、シャムの宮廷バラモン司祭が、かれらの礼拝式のいくつかにおいて、タミール語を使ったという我われの知見と一致する (Quaritch Wales, (1931,; Ch. V 参照)。
- 63) (原注) このことは、チェンマイ創建 (1296年頃) の後にできたとされる Jina-kālamāli に記述された時代であり、そして、おそらく14世紀の末頃の時代における Sīhalasaṅgaha の序文の頃かすぐ後である。Jayawickrama (1969: XXIV) 参照。
- 64) 正統的ジャータカ中第276話。仏が祇園精舎におられたとき、鷲鳥を殺した一人の比丘について話された物語。このジャータカの中には、バラモンたちの質問に対して、菩薩は偈をもって答えたところがある。
- 65) Jāta No.276. ブッダが祇園精舎におられたとき、鷲鳥を殺した一人の比丘について語られた本生物語。
- 66) Lāṅka: かつてインドの人がスリランカのことを呼んだ地名。
- 67) 原著では、stary, 論文集では、stray となっているが、story と修正して読む。
- 68) 古代インドの仏教社会で、海洋遠くにあるとされる伝説上の黄金の島で、ジャータカによく現れる地名である。近年、これが現在のミャンマーのタトンあたりと推測されている。
- 69) 著者は、この王が、これら両都市の創設者であることが信じがたく、不可能であるとしているが、両者はともにインド古代都市の名前でありながら、ともに東南アジアの都市の名前でもあったという説があるので、あながちそうとは言い切れないであろう。すなわち、Haṃsāvati はビルマのペゲー市の古代名とされ、また、Dvāravati (Tawāravadi の古国名で、正式には Dvāravati) は西暦 6 ~ 10 世紀頃、バンコクの西方約55キロのナコーンパトム (第一都) (タイで最初に建てられた巨大な仏塔がある) を都とした仏教国で、支配者はインド系とされる。この名前は、後、アユタヤ及びバンコクの正式名の一部に “krungthep tawāravati/ krung thep-ta wā rawati” として残っている (『タイ日辞典』より)。
- 70) 「大パリニッバーナ経」第4章(15)ボーガ市における四大教示：四つの場合、即ち一人の修行僧から、またはある修行僧の集いで、あるいは長老・修行僧の集団から、または一人の長老からある教えが釈尊の教えであると聞かされたとき、それが釈尊の真趣意に合するかどうかを決定する規準を述べている。そして如何なる場合も經典に引き合わせ、戒律に参照吟味して合致しているかを決定せよと教えている (中村 元訳『ブッダ最後の旅』岩波文庫, p. 102 以下参照)。